

トロンボーン

【英：trombone / 独：Posaune / 伊：trombone / 仏：trombone】

.....楽器データ.....

サイズ：全長約 116cm

トロンボーンの名曲：ワーグナー《タンホイザー》序曲、《ワルキューレの騎行》ラヴェル《ボレロ》マーラー交響曲第3番、モーツァルト《レクイエム》など

トロンボーンを愛した作曲家：ブルックナー、チャイコフスキー、ワーグナーなど

トロンボーン吹き有名人：谷啓、グレン・ミラー、アレッシ、リンドベルイ、スローカー、ベッケ（最後の4人はトロンボーン界の“3大テノール”のような存在）など



.....

オーケストラのステージ、ひな壇の後ろのほうで、なんだかいそがしように管を伸ばしたり縮めたり……。今回の楽器紹介は、そんなユニークな奏法のトロンボーンのお話です。

他の金管楽器がピストンやロータリーといったメカニカルな機構を持っているのに対して、見たまんまのシンプルに、管のスライドという部分を伸び縮みさせて演奏するのがトロンボーンです。単純なシステムなだけあってルーツは古く、現在オーケストラで使われる金管楽器のなかでは最も古いものです。当初は教会のなかでコラールの伴奏などに使われていました。だから、よく西洋の天使が手に持っている楽器、あれがトロンボーンなのです。オーケストラに導入されるようになってからも、最初は宗教曲——ミサ曲やレクイエムなどで主に使われていました。

トロンボーンには、実は“大きいトロンボーン”と“小さいトロンボーン”があります。一般的に

使われる楽器では、小さいのはアルト・トロンボーン、標準サイズがテナー・トロンボーン、管の径も音色も太めなのがバス・トロンボーンです。ステージでは向かって一番右側に座っている人がバス・トロンボーンを吹いています。最近ではオーケストラでは、テナー2本とバス1本という組

み合わせが多いのですが、昔はアルト・テナー・バスを1本ずつが標準だったんですって。音域も合唱のアルト・テノール・バスに対応しているそうです。実はこのほかに、オーケストラで使われることはありませんがソプラノ・トロンボーンやコントラバス・トロンボーンというのもあるんです。今日演奏する曲目ではアルト・トロンボーンも使われませんが、アルトは一目見ただけでサイズが小ぶり。ただし、小さいからといって高音を出す大変さはテナーと変わりありません。強いて言えばトランペットに近い明るい音色で、ベートーヴェンの《運命》などではよく使われます。

オーケストラのなかでトロンボーンと言えば、オケ経験者の誰もが思うのは出番が少ないこと。今日のプログラムでも前半はお休みです。今回は出番のある後半の曲目ではけっこう活躍しますが、いつもは出ていても本当にヒマなことも多いです。たとえば、ベートーヴェンの有名な交響曲の《第九》70分前後もかかるこの曲でも、譜面はたったの1枚だけ（ヴァイオリンは20ページもあるのに！）。休みが長い場合、楽譜にはガイドのために他の楽器の旋律が小さく書かれていたりするのですが、自分の吹くところよりもガイドのほうが音符が多いなどということもしょっちゅうです。トロンボーン出身の指揮者ってけっこういるのですが、これは「休みが多い」→「ヒマ」→「他人の演奏をよく聞いている」→「その演奏はそうじゃないだろ！」→「オレだったらこうやらせるのに」→「オレに指揮させる！」という、風が吹けば桶屋が儲かる的な理由があるのかもしれませんが。

出番が少ないとはいえ、オーケストラの中では重要な存在です。コラールなどであたたかい和音



左がバス、右がテナー・トロンボーン

が欲しいときや、それとは対照的に強烈な音響が欲しいときにもよく使われます。逆に言えば、そういうシーンがない曲は出番がなかったりするのですが……でも、本当はそれだけの楽器じゃないんです！ 多くの作曲家にも誤解されているような気がするのですが、人の声に近い音色で、きれいなメロディも美しく吹けるし、細かい動きだってOKです。爆音あつかいされてしまうことも多いのですが、そういう楽器ではないということはぜひ覚えておいて欲しい点です。埼玉フィルでもそんな美しいトロンボーンを存分にご披露できるチャンスがあるといいますが……。オーケストラのなかでは、今日も演奏するチャイコフスキーは、トロンボーンの特徴をよく活かした、それまでとは違う機能的な使い方をした作曲家でした。

さて、和音が重視されることが多いため“3人で一つの楽器”とも言われるトロンボーン。本日のステージ上の団員3人の素顔を覗いてみましょう。まずは、トロンボーンを選んだ理由を聞かせてください。

「ポリシヨイ・サーカスで、一輪車に乗りながらトロンボーンで《剣の舞》を吹いていたのを見たことがあったのです。それが印象的で選びました」「ぼくは初心者で入った吹奏楽団で、わけがわからないうちに割り当てられたのが最初でしたね」「中学校で吹奏楽を始めたときは、トランペットだったんですよ。でも先輩が引退してトロンボーンがいなくなって、身体が大きいからとまわされたのが縁で、大学で専攻するまでに……」——みなさん演奏歴が長いですが、トロンボーンを吹いていてどんなところが好きですか？



本当に休みばかりの《第九》のトロンボーン楽譜矢印のような小さい音符はガイドなので吹きません

「歌曲や弦楽器の曲をアレンジした美しいメロディを吹くのが好きですね。たとえばピアノ伴奏でラフマニノフの《ヴォカリーズ》とか、いい曲はたくさんあります」

「3人で和音がバッチリ完璧に決まったときには、思わずガッツポーズをしたくなりますよ」——それだけ和音を本当にぴったり合わせるのは大変ということでもあるんですよ。

「スライドをどこで止めても音が出る……ということは、シとドの中間の音などというのも可能なわけで、音程の感覚をきちんと自分で持っていることはとくに重要です。それはどんな楽器でも同じでしょうけど」

「速い曲も大変です。他の楽器に比べて、演奏するときの動きが大きいので」

「一番苦労するのは長い休みの直後にいきなり難しい出番があるとき。《運命》とか《ボレロ》とか——どちらの曲も、音がとても高いですよ。休みが長いのも善し悪しですね。

「いつも休んでばかりですいません、とも思っんですけどね」

「でも、基本的にはもっと吹かせて欲しいなあ」——なにか面白いエピソードなどありますか？

「吹いていて、スライドが抜けて落としちゃったなんていうのはよく聞く話です」

「ぼくはやったことがありますよ。汗で指がすべて、スライドが飛んでいっちゃうんですよ」

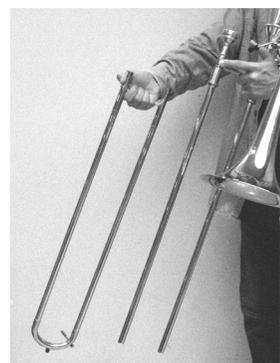
「あとは、前に座っているファゴットの人をついちゃうとかね」

——それはファゴットの人もびっくりするでしょうね！ 本番でそういうトラブルがないように気をつけてください～。

今回のステージでは、《1812年》で団員以外の奏者にもお手伝いいただき、増強された金管陣が大活躍します。コメントをくれたステージの3人とともに、どうぞお見逃しなく！

* *

毎回、演奏会のプログラムで、オーケストラで使用される楽器をひとつずつ紹介しています。次回もお楽しみに！



スライドを抜くとこんな感じ